

母親と死別した男子学生の「喪の仕事」

鶴田一郎

(広島国際大学心理科学部臨床心理学科)

【要約】本研究では、まず母親と死別した男子学生（E君）の事例を提示し、その悲哀（喪）を受け容れるプロセス、すなわち「喪の仕事」(mourning work)の視点から考察することを通じて、次のことが明らかになった。それは、E君が「喪の仕事」「悲哀の過程」を進めるために重要であったこととして、第一に躁防衛を少しずつでも崩していったこと、第二に遺された人々(父や兄弟姉妹・親戚・同級生など)との関係を修復して、それらの人々を心理的に受け容れたこと、第三に自己自身を受け容れることによって、悲哀の過程を歩み、本当の意味での母の死の受容が達成され、将来への希望の道が開かれたことが挙げられる、ということである。

I. はじめに一問題の所在

身近な人々と死別し、その喪失体験により、心身の調子を壊し、学生相談室を訪れる学生たちがいる。それが仮に病気や事故や災害によるものであっても、親しい人・愛する人との突然の別れが、その人に与える影響は計り知れない。ましてや、それが自殺であった場合、さらに大きなショックを遺された人々に与える。

阪神淡路大震災で家族を亡くした学生がいた。恋人を交通事故で亡くした学生がいた。父親が過労自殺した学生がいた。犯罪被害者遺族の学生がいた。障害の重い弟を亡くした学生がいた。そして私自身、何人かのかげがえのない人を病気や事故や災害や自殺で亡くしている。これが本研究執筆の最大の、また唯一の動機である。

そこで、本研究では、上のテーマを考えていく第一歩として、母親と死別した男子学生の事例を提示し、その悲哀（喪）を受け容れるプロセス、すなわち「喪の仕事」(mourning work)の視点から考察したいと思う。

II. 事例の概要

学生：E君、男子、来所時19歳、文系学部2年生。

相談内容：同じ実習グループに迷惑な人がいる。

来談経緯：保健室を経由した自主来談。

家族構成：父(自営業)・母(2年前に死亡)。長姉・次姉・兄(いずれも社会人で独立)・E君の四人兄弟姉妹。以上、六人家族。

本人の生活形態：アパートでの一人暮らし。

初回の本人の印象：表情も明るく、話していることもわかりやすい。ただし、自分のことは語らない。身なりはさっぱりきちんとしている。

Ⅲ. 面接の経過

面接は原則週一回(約50分)とした。初回は11月中旬で、前後期制の大学なので、来所した時期は、後期の半ばに当たる。途中二週間ほどの冬休みが入り、全体として約四ヶ月の間に10回の面接を行なった。

以下、E君およびその他の人の言葉を「」、カウンセラーをCo、Coの言葉を<>で記す。

第1回(X年11月中旬)

E君は入室して挨拶が済むなり、すぐに次のように一方的に話し始めた。「学科の実習グループがある。自分(E君)をリーダーとしてメンバーは10人いる。その中に迷惑な人(A君)がいる。A君は2歳年上だが、大人な部分が全然なく、グループの約束事、例えば何日の何時に集まるということが守れない。議論を自分から吹っかけてくるが、事の核心になると逃げる。またE君に対して『お前の考えはおかしい。精神病院に行け!』などと平気な顔で言う。基本的にはまじめな人なのだが、ストレスが溜まると同級生、特に同じ実習グループの人に当たる。自分(E君)の彼女が同じグループにいるが、二人で話していると、A君がちょっかいを出してくる。『俺は日本を変えてやる』などとA君には救世主願望があるが、その反面、日ごろの行動はちゃらんぼらん。E君はこころの中で『身近なこと、自分のことから変革していけば』と思ってしまう。A君は『俺は中学時代空手をやっていた』が自慢で、直接暴力を振るうわけではないが、空手のポーズをとって人を威圧してくる時がある。そのような人物なので、グループを替わって貰いたいのだが、初めに決めたメンバーの変更ができず、他のグループ・メンバーも大変迷惑している……」。この間、Coは話を傾聴。E君は、にこやかにそして明瞭な口調で話し続けた。

第2回(X年11月下旬)

「初回到話したA君のことがストレスとなり、最近体調が悪い」とE君が話し始める。Co<どんな感じで体調が悪い?>。E君「突然偏頭痛になったり、もともと心臓が悪いので心臓が痛くなる。ただし病院に行くほどの症状がないので純粋にA君からのストレスによるものと考えている」。

話題が変わり家族の話になる。E君の実家は大学のある町から電車で一時間ほどの自然が豊かな地域にある。E君「四人兄弟姉妹の末っ子で、上がすべて独立しているので、自分だけが父に養われている」。Co<お母さんにも養われているんじゃないの?>。E君「母は関係ない。養われていない。アルコール依存症やリストカットなどで、さんざん迷惑をかけられた」。さらに母親の話を吹っ切るように「ところで、父はすぐ怒る。先日も口論になった。父に『おまえの人生の意味は何だ!』』と言われたが、それに直接答えなくて、自分(E君)は心の中で『人に言う前におまえ(父)はどうなんだ!』』と思った。そして気が付いたら、カッターで自分(E君)の指先を切っていた。指先の血を父

に見せ『(俺の人生の意味は)これだ!』と叫んだ。しばらくしてE君「すごい家族関係なんです」と笑顔で語る。Coは話を傾聴すると共に、心の中でE君の話し方は少し芝居がかっているようにも感じていた。

第3回(X年12月上旬)

「授業が長引いた」と言いながら息せき切って相談室に入ってくる。そして、A君と徐々に距離が取れるようになったこと、保育士の資格を在学中に取りたいことなどが語られた。

第4回(X年12月上旬)

E君は前の相談者とかち合わないように相談室の外の陰になる部分で隠れていた。そして前の相談者が帰ってから入室。E君「やはり、相談者同士が顔を合わせるのはよくないと思った」。Co<それはどうもありがとう>。E君はニコニコしながら、A君とは相変わらず距離を取っているが、最近、A君から突然「お前は境界性人格障害だ!」と言われたことがあったと話す。E君は内心「俺がそうなら、お前もそうだろう」と思ったそうである。

そしてA君の話しになる。E君の話しによれば、A君の両親は共に聴覚障害者で、そのことでA君は子ども時代にいじめにあった。そのことは気の毒に思うが、厳しい表情でE君は「自分は同情はしない」ときっぱり言う。またA君は三兄弟姉妹の末っ子で甘えん坊のところがある、という。Coは内心<E君とA君は似ているところがある。だからA君がいじめにあっていたことも同情的になれないのだろう。もしかしたらE君にもいじめられた経験があるのかも>と思った。

第5回(X年12月中旬)

家族の話になり、E君は次のように語る。父母とも実の親であるが、父は離婚歴一回の養子で、E君の母と再婚するまでは修行僧をしていた。今は妻(E君の母)の実家の自営業をついでいる。母も離婚歴があり、上の三人の兄弟姉妹は母の連れ子である。母はE君が小さい頃よりのキッチン・ドラムカーで家族が酒を隠しても見つけて飲み続けていた。母には常に希死念慮があり、E君が物心ついた頃より自殺未遂を繰り返していた。2年前、アルコール依存症で入院していた病院で喉に痰を詰まらせ窒息死した。E君にとっては「事実上の自殺」と感じた。

母の連れ子である三人の兄弟姉妹は、まず長姉は母に振り回されており、一度は自身もおかしくなり包丁をもって暴れたこともある。次姉はE君に言わせれば人付き合いが苦手で自閉的、長男である兄は養子に出される予定である、という。なお、これらの家族のことを語る時にE君は少しおどけたように他人の話でも語るかのように冷静に話した。

続けて次のように話す。一ヶ月半くらいで母の三回忌になるので、実家に帰らなければならない。その時に家の後継ぎ問題について親戚一同での話し合いがある。E君は末っ子なのだが、戸籍上長男になっている。上の三人の兄弟姉妹は母のかつての配偶者(夫)だった人の名前を継いでいる。また父は養子のため、今のE君の名前は母方の名前である。その母方の家をE君に継いでもらいたいというのである。しかし、母方の家業である父の仕事をE君につがせようというのではなく、父と

も母とも血が繋がっているE君に母方の家を名前だけ継いでほしいだけということらしい。それでもE君は嫌で「断ろうと思っている」と語る。なぜなら、かつて母方の祖父母から「おまえ(E君)は父親を家につなぎとめるために無理やりつくった子どもだ」と聞かされたことがあるからである。E君にとって今の家族は「他人のようだ」と苦しそうに語る。この後、大学が冬休みになる。この回、Coは傾聴に終始。

第6回(X+1年1月中旬)

冬休み明けの面接。E君、珍しく沈鬱な表情で、子ども時代の話になる。E君が小学2年の時、母が原因と思われる火事で家が焼けた。小学3年の時、母が家の裏の電柱で首をくくっているのを見て、あわてて姉と助けた。母の自殺未遂は三年前に亡くなるまで度々繰り返された。子ども時代、両親はいつも喧嘩していた。E君から見て、父は優しいというより自分に無関心である。一方、母は何かにつけ厳しく口やかましかった。父母は他の兄弟姉妹にも同じようだった。また、E君の兄弟姉妹との関係は、年齢が離れているせいもあって、お小遣いをくれたりなど、一方的にかわいがられるような感じだった。普通は愛によって結ばれた二人に子が授かるものだが、うちの両親は、そうではなかった。母にとり自分(E君)は夫(父)をつなぎとめるだけの材料であり、父は「子どもは親の所有物」と放言してはばからない人である。この回もCoは傾聴に終始。

第7回(X+1年1月下旬)

E君、にこやかな落ち着いた表情で次のように語る。E君の小中学校時代は、母親のことでずっといじめにあっていたが、高校生になり同性の親友と呼べる人ができて学校へ行くのを生れて初めて楽しいと思えるようになった。大学に入り、家から離れて、精神的には楽になった。「もし以前のまま家にいたら、自分はどうなっていたかわからなかった」と考えるとぞっとする。この回もCoは傾聴に終始。

第8回(X+1年2月上旬)

母の三周忌が近づき、家の後継ぎ問題の不安を語る。ただ、E君の表情は思ったよりも明るかった。以下、E君の話。家の名前を継ぐと、それに伴って責任が生じる。家業は父親の代で閉じると言っているが、名前だけ家を継ぐというのにも抵抗を感じる。親戚のお年寄りたちには「この家を途絶えさせてはいけない」としきりにプレッシャーをかけられ、悩みが深くなっている。この回もCoは傾聴に終始。

第9回(X+1年2月中旬)

この回、ほとんどが学生生活についての他愛ない世間話を楽しそうに語っていたE君だが、最後になって「いまだに大きな音がすると、ドキッとしてしまう。自殺を繰り返していた母親を思い出して」と表情を変えて語る。この後、Co・E君ともに沈黙の内に、この回終了。

第10回(X+1年2月下旬)

週末、母の三周忌に実家に帰り、夜、家の後継ぎ問題についての親族会議が開かれた。一応、家を継ぐという問題はE君の就職時まで保留されることになった。また、迷惑に感じていた同級生のA君のことが、E君はほとんど今では気にならなくなった。それよりも将来、保育士など子ども関係の仕事に就くために今は一生懸命勉強したい、と語る。Coは<君が、そのような心境になってくれたのは本当に嬉しい>とE君に伝え、E君は、それに頷いた。またE君が、遠慮しながらも、この回で面接を終了したい旨をCoに表明したが、Coも喜んで承諾し、握手をして別れた。

IV. 考察

喪の仕事(悲哀の仕事)に関しては、小此木(2002)によって「愛着依存の対象を喪失した際に起こる心的過程を喪(悲哀 mourning)といい、徐々にその愛着依存の対象から離脱していく心の営みをフロイト Freud,S. は喪(悲哀)の仕事 mourning work よんだ」(p.464)と紹介されている。つまり、喪の仕事とは、かけがえのない愛する人・親しい人との離別によって起こってくる心の痛みや切なさなどの悲哀の感情が癒されていく心的過程のことだと言える。

事例のE君は二年前に母親と死別した。この母親は、E君が小さい頃よりのキッチン・ドランカーで家族が酒を隠しても見つけて飲み続けていた。また、母には常に希死念慮があり、E君が物心ついた頃より自殺未遂を繰り返していた。さらには、2年前、アルコール依存症で入院していた病院で喉に痰を詰まらせ窒息死した。以上のようなことからE君にとっては母の死は「事実上の自殺」と感じた(第5回)。ここに愛情・依存の対象を失ったことによるE君の深い喪失感を想像せざるを得ない。

また、E君の子ども時代、母親が安定した「心理的基地」(psychic base)になりえず、それゆえ母と子の心の絆が弱く、互いの心の中に相手がしっかり根付く愛着(attachment)関係も不十分であったのであろう。第6回に語られたE君が小学2年の時、母が原因と思われる火事で家が焼けたこと、小学3年の時、母が家の裏の電柱で首をくくっているのを見て、あわてて姉と助けたことのエピソードは壮絶な体験であっただろう。以上のようなことから派生したであろう「分離不安」(separation anxiety)や「見捨てられ不安」(abandonment anxiety)はE君の心理的成長に影響を与え、第7回に語られた小中学校時代にいじめられたことの遠因になっているのではないだろうか。

E君は、子ども時代は常に母を喪うのではないかという「予期不安」(anticipative anxiety)に怯え、それに抗うこともできず、心配と不安に満たされた生活を長く続け、母を実際に喪ってからも悲哀の苦痛に満たされ、それが十分に癒されなくて苦しんでいた、と思われる。

その苦しみは第2回の次のようなE君の語りにも象徴的に現れていた。

それはE君の「父だけに養われている」という発言から始まった。そしてCo<お母さんにも養われているんじゃないの?>という質問に対して、E君は「母は関係ない。養われていない。アルコール依存症やリストカットなどで、さんざん迷惑をかけられた」と答える。さらに母親の話を吹っ切るように「ところで、父はすぐ怒る。先日も口論になった。父に『おまえの人生の意味は何だ!』と言

われたが、それに直接答えないで、自分(E君)は心の中で『人に言う前におまえ(父)はどうなんだ!』と思った。そして気が付いたら、カッターで自分(E君)の指先を切っていた。指先の血を父に見せ『(俺の人生の意味は)これだ!』と叫んだ」と語る。しばらくしてE君「すごい家族関係なんです」と笑顔で語った。

Coが、この時感じた違和感、特にE君の話し方が少し芝居がかっているようにも感じられたことは、躁的防衛(maniac defense)をCoに想起させた。躁的防衛とは「死者を無縁なもの、排除すべきものとして扱う心理によって、喪の心理や、自己自身の死の不安を、心から追い払い、心の安定を得ようとする」(小此木 1979, p.88)ことである。それは一方で、自我の疲弊を招き、それを身体で支えられなくなると、E君の偏頭痛や心臓神経症の症状など、心身症的症状として露呈する(第2回)。

ところで、躁的防衛の一種として「置き換え」(displacement)があるが、本来、母親に向けられなければならないものが他の身近な人々(父や兄弟姉妹)に向けられていた。

まず父親だが、E君の話しによれば、父母とも実の親であるが、父は離婚歴一回の養子で、E君の母と再婚するまでは修行僧をしていた。今は妻(E君の母)の実家の自営業をついでいる、とのことであった(第5回)。また第6回では、子ども時代、両親はいつも喧嘩していた。E君から見て、父は優しいというより自分に無関心である。また、普通は愛によって結ばれた二人に子が授かるものだが、うちの両親は、そうではなかった。母にとり自分(E君)は夫(父)をつなぎとめるだけの材料であり、父は「子どもは親の所有物」と放言してはばからない人である、と語った。このように、父に対しては「置き換えにより悪玉視する態度」という躁的防衛が見られる。

次に兄弟姉妹だが、第5回のE君の話しでは、母の連れ子である三人の兄弟姉妹は、まず長姉は母に振り回されており、一度は自身もおかしくなり包丁をもって暴れたこともある。次姉はE君に言わせれば人付き合いが苦手で自閉的、長男である兄は養子に出される予定である、という。なお、これらの家族のことを語る時にE君は少しおどけたように他人の話でも語るかのよう冷静に話した。ここから兄弟姉妹に対する「置き換えによる無関心な態度」という躁的防衛が見られる。

この躁的防衛を自身に引き戻さねばならないという課題がE君にあった。それは第5回から語られた家の後継ぎ問題によって明確化した。それは、次のような話だった。一ヶ月半くらいで母の三回忌になるので、実家に帰らなければならない。その時に家の後継ぎ問題について親戚一同での話し合いがある。E君は末っ子なのだが、戸籍上長男になっている。上の三人の兄弟姉妹は母のかつての配偶者(夫)だった人の名前を継いでいる。また父は養子のため、今のE君の名前は母方の名前である。その母方の家をE君に継いでもらいたいというのである。しかし、母方の家業である父の仕事をE君につがせようというのではなく、父とも母とも血が繋がっているE君に母方の家を名前だけ継いでほしいだけということらしい。それでもE君は嫌で「断ろうと思っている」と語った。

自分の家族に対して「他人のようだ」と放言するE君だが、その裏には、本来自分と父親や兄弟姉妹を結び合わせるのには母親なのだという思いが働いており、それがいかようにも達成されないもどかしさは、その思いを無意識界に抑圧したと考えられる。それが躁的防衛につながっているのだが、上の相続問題を経て、それらの意識化が図られる。まず、当初、兄弟姉妹とは血が繋がっていないと露骨に語っていたが、母の連れ子であるそれらの人たちは半分はE君と血が繋がっているわけだ

し、また、第6回に語られたように、自分(E君)の兄弟姉妹との関係は、年齢が離れているせいもあって、お小遣いをくれたりなど、かわいがられるような感じだったと語る。この話などから少しずつの兄弟姉妹への思いの変化、受容がうかがえる。

また、第8回に象徴的だが、父親に対しても同様である。第8回では、母の三周忌が近づき、家の後継ぎ問題の不安を語った。ただ、E君の表情は思ったよりも明るかった。以下、E君の話。家の名前を継ぐと、それに伴って責任が生じる。家業は父親の代で閉じると言っているが、名前だけ家を継ぐというのにも抵抗を感じる。親戚のお年寄りたちには「この家を途絶えさせてはいけない」としきりにプレッシャーをかけられ、悩みが深くなっている、ということだった。これにより、自分の家業を継がせるという自分の方の都合から父がE君に相続を勧めていたのではなかったことがわかった。父は父なりの愛情がE君にあったことがE君に少しずつ感じられるようになっていったのではないかと思われる。したがって、父親を少しずつ受け容れる気持ちができいったので、表情が明るくなっていたのではないかと思われる。現実としては、後に家の後継ぎ問題はE君の就職時まで保留されることになった(第10回)。

父親や兄弟姉妹との関係の変化は、本来の課題である母との死別に関する「喪の仕事」、悲哀の過程への参入を容易にしたと考えられる。第9回で、はじめ、ほとんど学生生活についての他愛ない世間話を楽しそうに語っていたE君だったが、最後になって「いまだに大きな音がすると、ドキッとしてしまう。自殺を繰り返していた母親を思い出して」と表情を変えて語ったことに象徴的である。それまでも母の自殺未遂についてはしばしば語られていたが、それらは皆、外から見て客観的に叙述しているという感じだったが、第9回では実感を込めて自分の体験として母の自殺未遂を語っている。ここにE君の本来の意味での喪の仕事・悲哀の過程への参入が伺われた。

一方、E君が相談室を訪れた当初の目的は非常に迷惑な同級生であるA君のことについての相談であった。E君の話を聴く内に、Coには、E君とA君は、その生い立ちにおいて似通ったところがあると感じた。例えば、親にハンディがあり子ども時代苦勞したこと、末っ子であること、いじめられた経験があることなど、第4回を中心に語られた。似ている人が気になる・腹が立つなどの現象は一般にも見受けられることだが、E君の場合、A君に対して、自分と同じ境遇で、いじめや両親のことは気の毒に思うが、だからといって「同情はしない」ときっぱり言い切っている。これには「投影性同一視」(projective identification)という自我の防衛機制が働いている。

投影性同一視とは、E君の場合を例にとると、自分(E君)の自我をよい自我・悪い自我に分割し、対象(A君)に対して悪い自我を投影し、その投影された悪い部分を自分(E君)の自我の一部と同一化し続け、対象(A君)に対して自分(E君)の自我の一部と同じ処罰的・批判的・攻撃的態度を取り続けたことである。いみじくも第4回に語られた「境界性人格障害」で目立つ自我防衛である。この状態から脱し、心理的自我境界をA君との間に再構築していくのがE君の課題であった。それは「投影の引き戻し」(withdrawal of projection)とも呼ばれるが、具体的には自分は自分、A君はA君という意識の回復であり、ある距離を持って関係を維持していけるようになるのである。実際に面接最終回(第10回)後半では、A君のことがほとんど気にならなくなった、と報告されている。このようにE君のA君との関係の修復が図られており、それは同時にE君自身にとって自己を真に受け容れ

ていく過程への参入を意味しているのだと考えられる。

一方、周囲の人たちとの関係の変化は、無論、E君自身の生き方・将来への希望にも影響を与えた。象徴的だったのは、「保育士など子ども関係の仕事に将来就きたい」と最終回到語ったことにある。第3回でも同様のことが語られたが、意味が全然違うと思われる。第3回到語られた意味は、多分に今まで十分に親からのケアを受けられなかったことへの反動形成(reaction formation)として、子どもたちの世話をしたいというニュアンスが感じられたが、最終回である第10回到語られたのは、自分なりの喪の仕事・悲哀の過程を歩んでいるE君の将来の創造的希望としての「子ども関係の仕事」であった。

つまり、第3回は「保育士」に限定されていた。その方がより傷ついた自我を衛り無意識の願望を満たしやすいからである。それに対して第10回は「(保育士だけに限定されない)保育士など子ども関係の仕事」と領域への視野が広がり、より将来の希望としての職業という面が強調されていた。この点はE君が、この後の人生においても、精神的意味での亡き母との程よい愛着関係を再構築し、現実に生きる周囲の人々とも、ある距離をもって意義深く関わりながら、E君なりの充実した人生を歩んでくれるのではないかという希望をCo側にもたらした。

今回の事例ではほとんどCoは発言していない。身につまされて発言できなかったのである。しかし、E君に好転的変容が起こった。それはたぶん今までCoから去っていった身近な人・愛する人・親しい人が後押ししてくれたのだと思う。別の表現をすれば、このE君との面接過程がCoにとっても喪の仕事・悲哀の過程になっていたのではないかと思うのである。ここから、今は亡き人々に感謝したい。

V. おわりに—まとめにかえて—

本研究では、まず母親と死別した男子学生の事例を提示し、その悲哀(喪)を受け容れるプロセス、すなわち「喪の仕事」(mourning work)の視点から考察することを通じて、次のことが明らかになった。それは、E君が「喪の仕事」「悲哀の過程」を進めるために重要であったこととして、第一に躁的防衛を少しずつでも崩していったこと、第二に遺された人々(父や兄弟姉妹・親戚・同級生など)との関係を修復して、それらの人々を心理的に受け容れたこと、第三に自己自身を受け容れることによって、悲哀の過程を歩み、本当の意味での母の死の受容が達成され、将来への希望の道が開かれたことが挙げられる、ということである。

文 献

小此木啓吾(1979)『対象喪失——悲しむということ』中央公論社。

小此木啓吾(2002)「喪の仕事〔悲哀の仕事〕」小此木啓吾・北山修・牛島定信・狩野力八郎・衣笠隆幸・藤山直樹・松木邦裕・妙木浩之(編)『精神分析事典』岩崎学術出版社、pp.464

—466。